

秋季大会を振り返って

会長 尾形徳昭

新型コロナウイルス感染拡大防止に最大限の注意を払いながら実施した「2020 秋田県高等学校野球大会」の教訓を生かしながら、秋季地区大会は目標を代表決定にとどめ、無観客試合ながら、入場者については若干制限を緩和して大会を開催しました。県大会ではウイルス感染状況を考慮しながら、入場者を選手の保護者等5名までと増やしたうえで、ほぼ同様の実施要項で大会を開催しました。大会運営については、常任理事の先生方を中心に、各学校の責任教師・副部長・監督・選手の皆さんの献身的な協力と、審判員を含め、大会と球場関係の皆様、報道関係の皆様、応援して下さった保護者の皆様等、大会に関わる全ての皆様の御尽力により、大会は全て成功裡に終えることができました。改めて皆様に深く感謝を申し上げますとともに、今後も新型コロナウイルス感染拡大防止に努めながら高校球児の育成に励んで参りますので、御支援を宜しくお願いいたします。

さて、秋季東北地区高等学校野球大会に参加されたチームを中心に今大会を振り返ってみたいと思います。東北大会に参加された角館高校、由利工業高校、湯沢翔北高校に加え、県大会ベスト4に進出した大館桂桜高校について申し述べますと、共通点は「投手力が他チームより優れていた」ことだと思えます。東北大会期間中、観戦された関係者の方々は、皆さん口をそろえて「秋田の投手はいい」と言ってくれていました。結果としては3校とも初戦敗退でしたが、県大会から見ていて、「とてもいいな」と私も思いました。

では何が良かったかという、これはあくまで私の私見ですので、その点を念頭にお読みください。

「投手」は文字通り「(ボールを) 投げる人」ですが、ただ投げればいいわけではありませんね。「狙って投げる」とか「考えて投げる」とか「計算して投げる」とか「投げる」の前にいろいろな修飾語をつけましたが、県大会のベスト4に残った各チームのエースの4人は、それぞれが、いろいろな「投げる」ができていたように思いました。つまりは、「ダブルプレーを取るために、インコースを狙って投げる」とか「フライを打たせるために高めのボールを投げる」というように、ボールを投げる意図が伝わってきていました。

野球のプレーにおいて「バッターが投球を打つ」とか、「野手が打球を捕る」というのは、常に受け身であり、対応がとても難しいものです。ところが投手の場合は、最初から自分がボールを持っているわけですから、9人の選手の中で、唯一自分の思い通りにボールを投げるができます。投手のみが、自由自在にボールを操ることのできる存在なのです。

県大会ベスト4の4人のエースの皆さんは、100%とは言いませんが、それに近いものを持っていると、私には感じられました（それに加えて牽制やフィルディングも上手でした）。仙台や石巻で彼らを見た人たちに「秋田の投手はいい」と言わしめたのは、彼らが投手としての根本的な素質を身に付けていて、それを見事に表現してくれたからではないでしょうか。偶然にも、4人ともタイプは右上手投げで、とてもよく似ています。将来がとても楽しみです。今回の東北大会を見て、投手力では十分東北のレベルに通用すると感じられました。この投手力を支える強力な攻撃力を身に付けるべく、このオフシーズンを過ごしてもらいたいと思っています。コロナ禍ではありますが、対策を十分行いながら練習し、来春までに各チームが大きく成長してくれるよう期待しています。

2020. 11. 20

追伸：「釈迦に説法」のようで、どうもすみません。